

研修報告書:

所属会派	おかや未来研究室	委員氏名	秋山良治
研修の名称	会派視察 東京都三鷹市「探求学舎」		
日程	令和6年5月22日（水）10時から12時		
研修内容等	受験も勉強も教えない教室の教育について		

【概要】

探究学舎は勉強のやり方や問題の解き方を教えるような、いわゆる学習塾ではない。成績アップも合格も目指していない。その代わり、子どもたちが「好きなこと」「やりたいこと」を見つけられるように、「もっと知りたい!」「やってみたい!」という興味の種をまき、ひとりひとりの探究心に火をつける、そんな興味開発型の学び舎でした。

【内容】

監督の水谷禎憲氏が1人に対応してくれました。水谷氏は元高校教師で教頭・校長などの管理職を歴任し、新校立ち上げに関わった経験もあるようでした。席につき、我々は1人ずつ自己紹介を行い、そこから我々の質問に丁寧に答えるというスタイルでした。

まず驚いたのが、「公教育には近づくな!」という認識を持っていたことです。理由としては、長く公教育に携わってきた水谷氏は、公教育はやりすぎてもダメ。足りなくてもダメ。全ては学習指導要領などの法律で規制されており自由度が低いことを指摘していました。それに比べ、探求学舎では学校のようなカリキュラムがなく、子どもたちが面白い、楽しいと思える仕掛けをたくさん用意しており、探求心・好奇心に火をつけること重点を置いていました。探求学舎は公教育ではカバーできない部分を補填するような形態をとっていました。

その手法は、リベラルアーツ(教養教育)を基礎としているとのこと。リベラルアーツとは、専門をひとつに絞るのではなく複数の領域を学び融合させることで、実社会の複雑な問題にさまざまな角度から立ち向かうことができる総合力を育てることの総称のようです。授業は1回90分で、宇宙・生命・進化など様々なテーマを設け2か月で1テーマとしていました。授業は親にも公開され、帰り道から授業の内容を、目を輝かせながら親に話始める子どもも少なくないとか。また、偉人がどういうプロセスでその偉業を達成したのか、歴史的な経過を学ぶなどの疑似体験も行っている。現在も活躍する人を呼び、直接学ぶこともあるようでした。

また、探求学舎は子どもたちの居場所にもなっている。これから公教育でも校舎を作るとすれば、知恵を絞り子供たちの安心安全と思える居場所の空間が重要で、最終的に居場所を決められるのは子ども本人のみだと強調していました。

現在の公教育に対しての意見として、少なくとも小3くらいまでの評価は必要ない。評価をやめることで、先生の負担も減り、子どもたちの自由度も上がる。さらには、現在の詰め込むだけ、教えるだけのティーチングの時代は終わり、これからはコーチングやファシリテーターの要素、さらにはプレゼン、

コメンテーターやエンタメ性の要素も求められるだろうし、必要だとおっしゃっていました。大学も6～700あるが減らすことや受験そのものが、変わる必要があると指摘されていました。

【講義の感想】

公教育では出来ないことをやっているとおっしゃっていましたが、公教育にも探求学舎のエッセンスを入れたら、子どもたちにとって楽しい授業になるでしょうし、子どもたちの探求心に火が付くことで学校がもっと楽しい場所になると思いました。探求学舎は子どもたちの居場所の役割もあるとおっしゃっていました。それに対し中島議員の学生の頃は、みんなが家にいるよりも楽しくて、学校が居場所だったようです。（私の頃もそうだったと思います）背景としては、昭和時代は今と比べると先生も児童・生徒も自由だったことが理由の一つのようです。居場所というキーワードは、これからの学校づくりに、とても重要になると思います。教育は10年後、20年後の岡谷市や日本を創るものですので、何においても最優先で取り組むべき事案だと考えています。今回の視察は午前中でしたので、実際の授業の様子を見ることはできませんでした。次回は授業を受けている子どもたちの表情や変化を見たいものです。岡谷市においても川岸学園構想をキッカケに市内の全小中学校の、これからの教育をどうするのか？将来の岡谷市にどんな人材が必要なのか？そんな議論が全市的に活発になるように取り組んでいきたいと思いました。



※写真は会派メンバーと探求学舎監督の水谷氏（後方中央）と